

1. 調査研究のテーマ、概要

調査研究のテーマ	地域教材を出発点とした人権学習の指導の在り方
----------	------------------------

○調査研究のテーマを設定した目的

平成30年、奈良県が行った「人権に関する県民調査」によると、「人権問題とは、差別を受けている人の問題であって、自分とは関係がない」という問いに対し、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した県民は86.8%に上り、多くの人が人権問題を自分に関わりがあるものとして捉えている。一方で、子どもの結婚相手が同和地区出身者や障害のある人、外国人などであった場合、「考え直すように言う」または「親としては反対だが、子どもの意思が堅ければ仕方ない」と否定的に回答した人の割合は、いずれも60%を超えている。これらの結果を見る限り、人権問題が真に自己課題となり得ているとは言い難い状況がうかがえる。さらに、これらの結果は平成20年の調査と比べてみたとき、大きな変化が見られなかったことにも人権教育が抱える課題があると考えられる。

本県では、これまでも児童生徒の生活に深く関係した教材や地域の課題に迫る教材等を創り出し、それらを使った学習が各学校で進められてきた。生活や地域に根ざした教材は、身近な人権課題を提起するものであるだけに、自分の問題として捉えて考えることができ、その解決に向けて創造的に取り組む意識や態度を育てるためにも効果的であると考えられる。児童生徒が人権に関する正しい理解や認識をもち、それらを現実の生活や自己の行動に生かしていこうとする意識や態度を育てるためにも、児童生徒の生活や地域に根ざした教材を活用した指導の質の向上が求められる。

そこで、地域教材を活用した具体的な実践を通して、人権教育を教育活動全般を通じて推進するため「地域教材を出発点とした人権学習の指導の在り方」をテーマとして、実践研究指定校による継続した調査研究を行いたいと考える。

○調査研究の概要

地域の課題や歴史を教材として活用することは、観念的・一般的な学習に陥りがちな人権問題についての学習を、身近でリアルなものとして根づかせることができるだけでなく、児童生徒が地域や生活の中にある身近な問題を通して、人権問題と自分とのかかわりを学び、その解決に向けて創造的に取り組む態度を育てるためにも有効である。

歴史の歩みの中で地域づくりや地域における人権確立のために努力した人々の生きざまを捉え、考えることから、人のもつ優しさやあたたかさ、心の痛みや苦しみに共感できる鋭く豊かな感性を醸成するとともに、差別を温存してきたものの見方や考え方を克服する力を高めていく。

2. 基本情報

研究指定校の概要

○学校名

川西町・三宅町式下中学校組合立式下中学校

○これまでの研究指定等の状況

近年実施分のみ

令和元年度「奈良の子どもの未来を拓く道徳教育推進事業」研究発表会

令和2年度近畿中学校道徳教育研究大会（「奈良の子どもの未来を拓く道徳教育推進事業」）

令和4年度第73回全国人権・同和教育研究大会奈良大会公開授業

○学級数

16学級（うち特別支援学級4学級）

○児童生徒数（R.6.1.29）

全生徒数：317名

○URL

<https://shikige-jh.edumap.jp/>

○指定理由

研究指定校は「地域教材を使った取組があまり行われていない」という校内教職員の意見をきっかけとし、地域で作成された読み物「忍性さん～笑顔のお坊さん～」を活用した指導計画及び指導案を令和3年度に作成した。令和4年度は指導計画や指導案の実用性を高めるための検討を重ねた。

県教育委員会ではこれまで、人権教育学習資料集『なかまとともに』（中学校版）に、ハンセン病問題についての認識を高め、共に生きる社会づくりにつなげるための教材を掲載し、その活用の促進を図っている。また、令和元年度には、ハンセン病問題の解消の取組を一層推進するため、長年、ハンセン病回復者との交流に取り組んできた「架け橋 長島・奈良を結ぶ会（架け橋の会）」との協働で、奈良県出身ハンセン病回復者からの聞き取りをもとにした小学校高学年向けの教材「心の架け橋」及び指導者用資料「人権教育の手びき第61集」を作成し、県内の学校・園等に配付した。ハンセン病問題教材の活用の促進を図り、人権尊重社会の構築に結び付けたいと考える。

研究指定校が行っているハンセン病問題を取り上げた研究は、県教育委員会が考える人権教育推進上の課題と軌を一にするものであり、児童生徒が人権に関する正しい理解

と認識をもち、自己の行動に生かしていこうとする意識や態度を育成することができる
と考えた。県教育委員会と式下中学校組合教育委員会、研究指定校が協働して調査研究
を円滑に進め、より効果的で実践的な調査研究を行っていきたいと考える。

○取り組んだ人権課題について

該当するものに○印、最も主要な人権課題 1 つに◎印を付与

①子供	○
②女性	
③高齢者	
④障害者	○
⑤同和問題	○
⑥アイヌの人々	
⑦外国人	○
⑧- 1 HIV 感染者等	
⑧- 2 ハンセン病患者等	◎
⑨刑を終えて出所した人	
⑩犯罪被害者等	
⑪インターネットによる人権侵害	○
⑫北朝鮮当局による拉致問題等	
⑬性的指向、性自認	
⑭その他 ()	

(1) 人権課題「子供」について取り組んだこと

令和4年6月に成立した「こども基本法」では第3条（基本理念）には「全ての子ども
について、年齢及び発達に応じて、自己に直接関係ある全ての事項に関して意見を表
明する機会・多様な社会生活に参画する機会を確保されること」について明記している。
子どもたちの自尊感情の醸成が人権教育推進上の課題として数年挙げられている本県の現
状に鑑み、「こども基本法」に明記してある「意見表明権」を保障すること、表明した意
見が子どもたちの生活に反映されることが、子どもたちの自尊感情の醸成につながると考
えた。そこで、研究指定校では生徒会活動において子どもたちが意見を表明する機会の確
保を図るとともに、その意見を審議する組織の整備を行った。そのことにより、県政につ
いての意見を奈良県に提出したり、校則の内容について変更を申し出たりと、子どもたち
の変容が見られるようになった。

また、「こども基本法」の第3条（基本理念）には「全てのこどもについて、個人として尊重されること、基本的人権が保障されること、差別的取扱いを受けないようにすること」を明記している。

研究指定校においては、学校や家庭、関係機関が連携して子どもを見守る体制の充実を図った。そして、必要だと判断した場合は、迅速にケース会議を開催して情報共有を行うとともに、解決策について話し合いを行った。

3. 調査研究の内容等

○調査研究の内容

人は、他者との関わりの中で多くのことを学び成長するが、子どもの頃より多様な人々と出会い対話することにより、一人一人が異なる個性や生活背景をもち、様々な思いや願いを抱いていることを知る。そのことを通して、相手の立場に立って考える力や相手に共感し、ありのままに受け止めようとする態度も育っていくものと思われる。また、様々な人々の生き方を学ぶことから、自分自身のこれまでの生い立ちを振り返り、今後の生き方について考えることができると思う。

研究指定校では、地域にゆかりのある先人「忍性」について地域教材を活用して学習を進め、「忍性」のライフワークについて学びを深める。当時、忌避の対象であったハンセン病患者を守り、支える活動に奔走した「忍性」を一つのモデルとして、自己の生き方について考える活動へと展開する。

また、ハンセン病回復者、解決に向けて立ち上がった方を招聘し、その方々の思いに触れながら、ハンセン病問題についての認識を深め、問題解決のための自己の行動を考えさせる。

そのような様々な方々との出会いを通して、多様な生き方や価値観に触れることにより、自己の生き方について考える取組について研究を行う。

○実施方法

研究指定校においては、以下の方法で実施していく。

(指導の充実に向けて)

- ・主にハンセン病問題についてアンケートを実施し、生徒の認知度を把握する。
- ・校内研修において、地域教材作成に関わった浄土寺前任職の講演、「映画『一人になる』」の視聴を行い、ハンセン病問題について教職員の理解を深める。また、地域教材を活用した指導のねらいを共通理解する。
- ・研究授業、研究討議を行い、指導のねらいや学習展開について振り返るとともに、現状における生徒の実態分析、指導計画の追加修正を行う。

(集団づくりの推進)

生徒が自己を肯定的に受け止め、自己実現に向けて主体的に行動できるようになるためには、自他の人権を守り、お互いの人権を尊重し合う集団づくりが重要である。集団づくりを推進するため次のことを実施する。

- ・様々な教科において、ロールプレイやペア学習などのグループ学習等を積極的に取り入れ、参加型・体験型・協力型の学習活動の充実を図る。
- ・互いを認め合い、多様性を尊重する集団づくりのために必要な「聴き合い、学び合

い」を通した授業の展開について職員研修を行う。

4. 検証・評価・改善・普及

○子どもについて

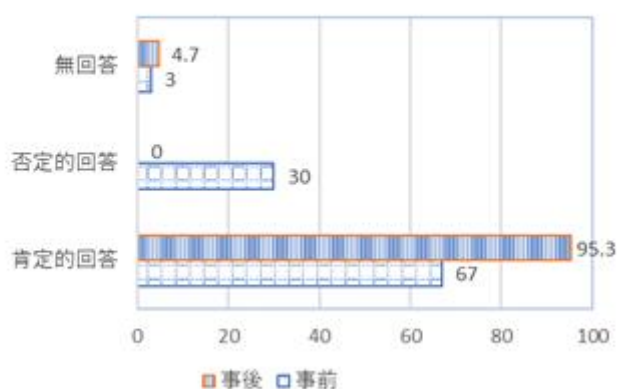
郷土の偉人である忍性を題材とした「忍性さん～笑顔のお坊さん」の紙芝居を生徒が作成し、その紙芝居を学校文化祭や地域の行事など、様々な場で生徒自身が披露するという取組を行った。紙芝居の作成や披露をとおして、ハンセン病患者を守り、支えた忍性を身近に感じることができたと考える。また、ハンセン病問題の解決を紙芝居をとおして訴えることで、その問題の解決に向かう実践者という自覚をもつことができたと考える。

○指導の充実に向けて

様々な人権課題についての学習を進めるに当たっては、それぞれの問題を社会や地域の課題として位置付けることが大切である。同時に、自分自身がその社会や地域の集団の一員であるという自覚を喚起し、自分に関わりのある課題として捉えるようにすることが重要である。そのためには、まずは教職員がそれぞれの人権課題についての知的理解を深め、その解決をめざす実践者の一人であるという自覚をもつことが大切である。研究指定校では、ハンセン病問題について調査・研究を行っている講師を招聘したり、動画視聴をしたりして職員研修を行い、知的理解の深化を図った。その結果、ハンセン病問題に関する学習時に、教職員が各自の考えや思いを生徒に話すことが増えてきた。

また、指導において生徒がハンセン病問題について知るだけに止まらず、自分にも関係がある問題であるという認識をもつことが大切だと考え、学習活動の工夫を行った。具体的には、教職員の問いかけた課題についてグループで意見を交流したり、学習後に自分の考えをまとめたりする活動を多く取り入れることにした。そのことにより自分の考えを振り返るとともに、自分の考えの変容についても客観的に知ることができるようにした。右のグラフはハンセン病問題について生徒が学習する前後に行なったアンケートの結果であるが、結果からも分かる通り自分事として考える生徒が大幅に増えたことは成果である。

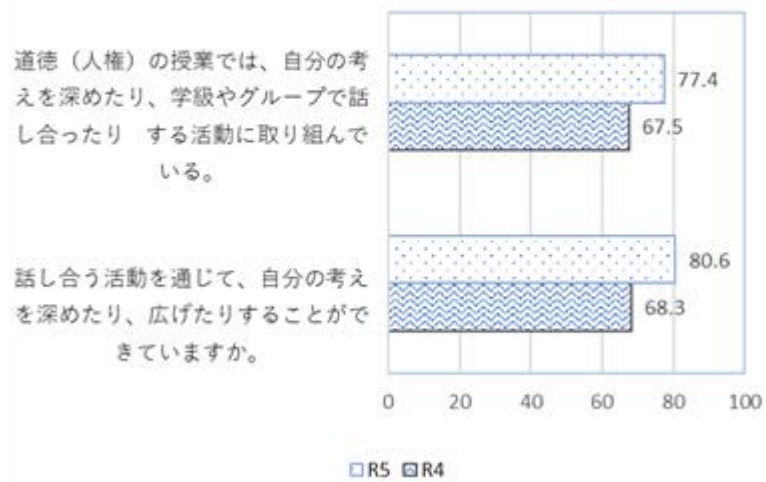
ハンセン病問題は自分に関係のあることだ



○集団づくりの推進

一斉・講義型の授業形態から、対話を通じた学び合う授業づくりに組織的に取り組むことができた。発表者や回答者などの役割を決めてグループワークを積極的に取り入れ、全ての生徒が発言する機会を確保するように配慮をした。そのような活動を通して、生徒同士がお互いについて深く知ることができ、休み時間の生徒間の交流も広がってきた。また、2学期の班長を決定する際に、これまで立候補をしたことがない生徒が手を挙げたり、文化際の合唱コンクールで欠席した生徒のパートの補充について生徒が自主的に話し合う場面がみられたりと、生徒の変容がみられた。さらに、右の全国学力・学習状況調査のとおり、令和4年度に比べて話し合い活動についての生徒の意識も向上した。

全国学習・学力状況調査



5. 人権教育に係る年間指導計画

(1年)

学年目標

- ア) お互いの違いやよさを認め合い、自分の「思い」や「考え」を伝えることができ、他者の気持ちを理解することができるなかまづくりを進める。
イ) 自分たちの身のまわりに存在する不合理・矛盾や差別に気づき、よりよい社会の実現に向けて考え、行動できる姿勢を培う。

1学期

- ①「なかまづくり」
 - ・ お互いの違いやよさを認め合い、豊かな人間関係の作り方について学ぶ。
- ②「ふるさと学習」
 - ・ 自分の住んでいる地域のよさを知り、誇りをもって語れる力を培う。
- ③「障がい者理解」
 - ・ 特別支援を要する人について学び、共に生きる社会づくりの一步として、安心して過ごすことができる学校づくりについて考える。

2学期

- ④「地域の産業」(キャリア教育)
 - ・ 自分の住んでいる地域の産業を知り、語ることのできる力を培う。
- ⑤「集団行動」
 - ・ 計画性、規律、マナー、公共道德を守る力を培う。

3学期

- ⑥「地域にゆかりの偉人に学ぶ1」
 - ・ 世阿弥の生き方や書物を通して、地域の特徴を探る。
- ⑦「違いを認め合う」
 - ・ さまざまな人の立場や考え、歴史的背景を理解し、正しい判断や行動ができるようになるための基礎を培う。

(2年)

学年目標

- ア) 人として最低限のルールや礼儀を身につけ、相手の立場に立って行動したり助け合ったりできる態度を養う。
イ) 自分自身の生き方や将来の夢について主体的に考え、自らの進路を自らの力で切り拓くことのできる能力を培う。

1学期

- ①「なかまづくり」
 - ・ お互いの違いやよさを認め合い、豊かな人間関係の作り方について学ぶ。
 - ・ 校外学習を通して、自分の役割を責任をもって果たすこと、他者と協調し合っものごとを達成すること、相手の立場に立って考え行動することを学ぶ。
- ②「地域にゆかりの偉人に学ぶ2」
 - ・ 忍性のとった行動をモデルとして自分の生き方について考える。
- ③「部落問題学習」
 - ・ 差別や偏見のない社会を実現するために自分たちができることは何かを考え実践しようとする態度を育む。

2学期

④「ハンセン病問題」

・ハンセン病問題について学習しその歴史的背景や現在社会における差別の現状を学習する。

⑤「職業観」

- ・社会で生きていくための最低限の人としてのモラルやマナーを身につける。
- ・職業について理解し、望ましい職業観を身につける。
- ・世の中へ出て働くということはどういうことかを理解し、進路選択を現実のものとして捉えさせる。
- ・自分の適性や将来の生き方について考え、希望する将来を実現させるために努力しようとする態度を培う。
- ・職場体験学習を通して、乳幼児やお年寄りとふれあうことで、子どもや高齢者への理解を深め、他者のいのちを思う心を育てていく。

3学期

⑥「在日韓国・朝鮮人差別の問題」

- ・「在日韓国・朝鮮人差別の問題」について学習しその歴史的背景や現在社会における差別の現状を学習する。
- ・差別や偏見のない社会を実現するために自分たちができることは何かを考え実践しようとする態度を育む。

⑦「平和学習」

・戦争の歴史を振り返り、平和の尊さと戦争の悲惨さを考えさせるとともに、過ちを二度と繰り返さないために、自分たちにできることは何かを考え、平和な社会を築こうとする態度を育む。

(3年)

学年目標

ア) お互いの人権を認め合い、一人ひとりの「思い」を理解し合いながら、共に生き、育つ、なかま集団になる。

イ) 自分の進路を見据えて、身のまわりにある不条理、矛盾や差別に気づき、それらに立ち向かう力を培う。

1学期

①なかまづくり

- ・自分の思いをきちんと言葉で伝え、相手の話を落ち着いて聞く姿勢を身につける。
- ・周囲の気持ちを考えて行動できる心を育てる。

②平和学習

・戦争の歴史を振り返り、平和の尊さと戦争の悲惨さを考えさせるとともに、過ちを二度と繰り返さないために、自分たちにできることは何かを考え、平和な社会を築こうとする態度を育む。

2学期

③進路選択に向けて

- ・自分の希望や特技、適性などに向き合いながら、自ら進路を切りひらいていく力を身につける。
- ・希望を実現させるために、お互いに支え合えるなかま集団になる。

3学期

④3年間のまとめ

・3年間で学習したことを通して、世の中の矛盾点や差別に気づき、考え、行動できる力を自身の中に育てる。

(全学年共通)

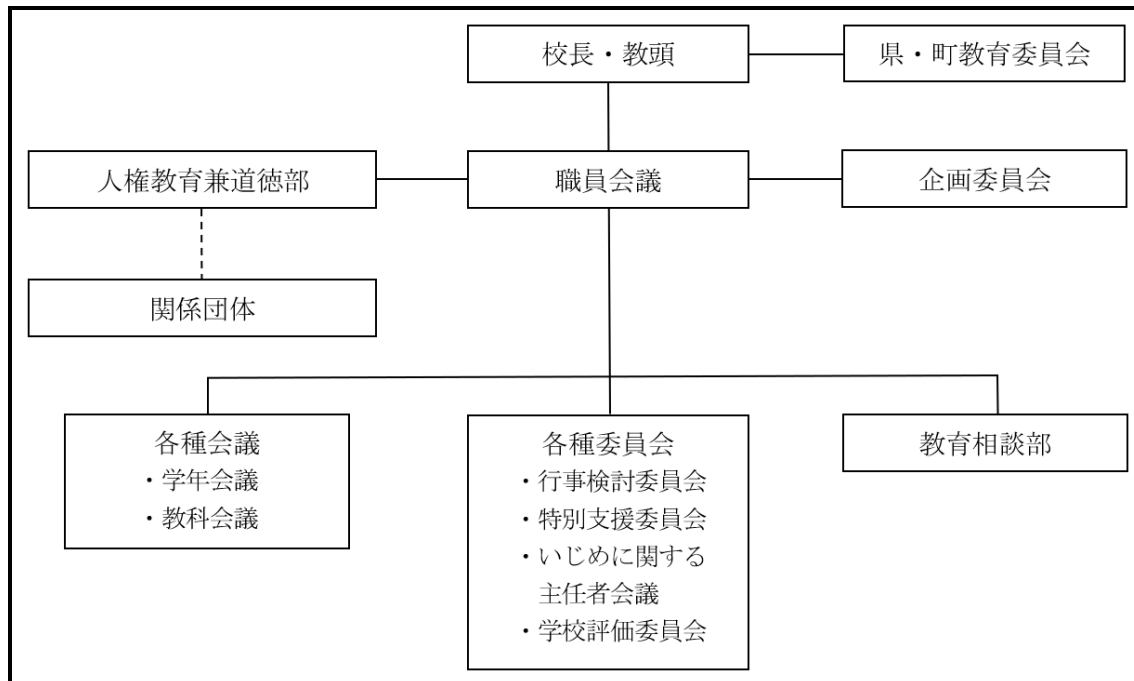
7月に「ネットトラブル防止教室」や「交通安全教室」を開催し、9月には、「生命のメッセージ展」とNPO KENTOの児島早苗さんによる講演会を実施する。時期未定であるが、エル・プロジェクト講演会として、「いのち・愛・人権」をテーマとしてのゲストを招いての講演会等を開催。3月に、「染谷西郷トーク&ライブ」を実施。

これらの取組を通して、自他の存在を大切にすること（尊敬と感謝によるつながり）と、日頃の言動とインターネットを介した受信・発信時に人権に配慮できるリテラシーと表現力を身につけさせること、それがこれらの取組を貫くねらいである。

*エル・プロジェクトとは

「いのち・愛・人権」をテーマとした生徒会事業を応援する取組で、各分野で活躍されているゲストから生き方を学ぶことと生徒が運営にも参加することによってリーダー性を育てることを目的としている。いのち(Life)、愛(Love)、人権(Liberty)、リーダー(Leader)の頭文字をとって、エル・プロジェクトと名付けた。人権は、「human rights」が一般的だが、ここでは「差別とたたかい獲得した自由」を意味する「Liberty」を採用した。


6. 推進体制（都道府県・指定都市教育委員会を含む）



○関連資料

【R4→R5】
次年度に向けて

映画
「一人になる」
との出会い



映画紹介 「一人になる」
—医師 小笠原登とハンセン病強制隔離政策—
監督 高橋 一郎
「一人になる」政策実行委員会 企画・制作
「もういいかい」政策協力・映画製作委員会

医師小笠原登(1888～1970)は、ハンセン病研究者。京都帝国大学医学部助教授。愛知県海部郡にある、真宗大谷派円周寺の次男に生まれる。祖父は住職であるとともに、漢方医であり「らい」患者の治療もしていた。京都大学では「らい」病の研究に心血をそそぐとともに、多くの「らい」患者によりそい治療にあたった。「らい予防法」成立以降は強制隔離政策が強化され、患者のカルテの病名欄に「らい病」と書く医師は警察に報告義務があったため、小笠原医師は患者が強制隔離されないようにあえて空欄にしたり、他の病名を書いた。その「空欄のカルテ」は現在も京都大学に保管されている。

「らい病」は不治の病ではないことを主張し、当時の国策であった「強制隔離・断種」政策に強く反対した。「らい」に関する三つの迷信を著わし、「らい病は不治の病ではない。遺伝する病気ではない。強い伝染病ではない。」ことを訴え、この迷信を脱却し正しい知識の上に対策を講じべきと主張。当時、らい医療の絶対的権威であった光田健輔と闘った。

「群れるな、ひとりになれ。みんなになるな、ひとりになれ。」とは、同調圧力に屈しない姿勢で、国家公務員の医師でありながら、国家の圧力に屈せず、患者のための医療を貫いた、医師小笠原登の生きざまを描いた映画である。映画製作プロデューサーは、「小笠原は医師、公務員、僧侶の三つの立場で、同調圧力に屈しなかった。どれほど孤独だったか、映画のタイトル群れるなはそういう思いからつけた」と語っている。

【R5の取組】

R5の人権学習

○映画「一人になる」を重点教材に

ハンセン病隔離政策に巻き込まれていった時代の中で、
異を唱え、世の中と対峙し、患者を守ろうとした人、
小笠原登医師の姿から学ぶ

【R5の取組】

R5職員研修～授業に入る前に～

○6月 訓覇浩先生
(ハンセン病市民学会共同代表、
大谷大学講師)



講演

「真の『隔離からの解放』に向けて
～「救済の客体」から「解放の主体」へ～」

【R5の取組】

月	日	曜日	時限	予定
11月	13日	月	1	ハンセン病問題導入 忍性さん 文化祭で発表された紙芝居(録画)を使って
	17日	金	1	アンケート、ハンセン病問題入門 ①
	20日	月	1	ハンセン病問題入門 ②
12月	6日	水	6	映画「一人になる」事前学習
	11日	月	1, 2	映画「一人になる」視聴(2限連続)
	14日	木	5, 6	訓覇浩さん講演会(2限連続)
	18日	月	1	講演会ふりかえり 訓覇さんへのお礼、感想
1月	10日	水	3	いままでの学習を振り返って 黒川温泉で起きたこと
1月	12日	金	5, 6	回復者の方から話を聞く(2限連続)
	19日	金	1	現代に残る偏見や差別の問題
	22日	月	6	身近にある偏見や差別の問題 (公開授業)

二年の人権学習
(ハンセン病問題)の取組

【4、R5の取組】

2023.12.14.訓覇浩さん講演会

「真の『隔離からの解放』に向けて
～「救済の客体」から
「解放の主体」へ～」

【R5の取組】

ハンセン病回復者の方との出会い

○当事者の方との出会いを通して

自分が“**当事者**”であることに気づく

【R5の取組】

回復者の方をお招きしての講演会の様子 (2024.1.12.)



【R5の取組】

2024.1.22.第2学年人権学習公開授業の様子



【4、R5の取組】

公開授業の様子



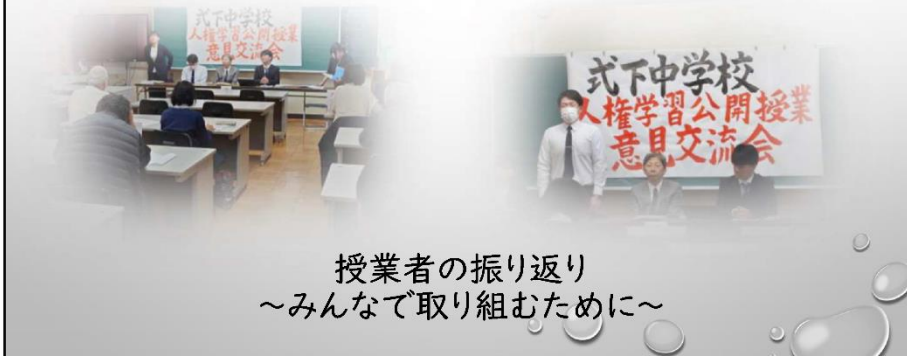
【R5の取組】

全学級の生徒の意見をタイムリーに共有



【R5の取組】

公開授業 (関係機関の方々に来校いただいて)



授業者の振り返り
～みんなで取り組むために～

【R5の取組】

意見交流会でいただいたご意見

- ①一人1台端末を活用し、各班の意見の発表・共有やそれぞれの考えを出し合いタイムリーに共有するために活用されていたが、思いのこもった声による発表も聞きたかった。
- ②最後にスプレッドシートで学年全体の意見が見られるようになったとき、生徒は他の子の意見に強い関心をもち、しっかり目を通していた。周りの子の意見も知りたいという姿勢が見て取れた。

③回復者の方を招いて出会いの経験をしたことと、今日の話合いの重なりが見たかった。せつかく直接語っていただいたことが生徒の心に響いているのかどうかを知りたかった。きっと、当事者の方を身近に感じたり、生涯忘れえぬ記憶になったりしたと思う。

④自分が出会った人権問題について、問題の当事者としての意識をもって、その差別がなく
なるまで一生涯取り組むという
気持ちでいる。立場に関係なく、
最後まで関わりたい。



⑤人権問題と出会うところとして学校があるので、正しく出会ってほしい。タブレットPCを活用しながらも、心のこもったお話をいただいたゲストの方へは手書きの手紙を届けたり、生き方宣言文を手書きで書くなど、工夫していけると思う。

⑥人間は差別をしてしまう。だから常に学ぶ必要がある。自分のもつ偏見に向き合うことが解決の糸口になる。

⑦最初は自分とは離れた問題のように感じていたと思うが、ハンセン病に対する偏見をもつ自分の家族にハンセン病問題を学んだあなたはどう説明するかと問われたとき、こたえにつまってしまう、書いては消し、消しては書いてを繰り返す生徒がいた。その姿の中に深まりを感じた。そういう内面の揺れの中に人権問題の本当のこたえがあるのではないかと思った。

⑧2学期に学校行事(文化祭合唱コンクール)を見学したが、聴き合い、拍手を送り合う姿、互いに認め合う姿が見られた。その取組は今日の様子にもつながっている。

【R5の取組】

学校として学年の人権学習と並行して行ってきたこと

- 「いのち・愛・人権」をテーマとした取組を大切に
 - ・芸術鑑賞会(12/7)
畑中廣之先生紙芝居公演
 - ・生命のメッセージ展(12/15~21)
児島早苗さん講演会「生命を越すものはない」
 - ・エル・プロジェクト講演会(3/11)
「染谷西郷トーク&ライブ」
- 有志生徒による紙芝居創作(後述)

【R5の取組】

芸術鑑賞会2023.12.7.(世界紙芝居の日に)

英語部生徒特別出演

畑中廣之先生紙芝居公演

英語版「忍性さん～笑顔のお坊さん～」

// 「ふるりの誇り 世阿弥」



【「紙芝居制作の会」の活動紹介】

2022年度「忍性&世阿弥」肖像画制作



(by美術部)

【「紙芝居制作の会」の活動紹介】

紙芝居制作の会 あしあと

【「紙芝居制作の会」の活動紹介】

紙芝居制作の会(畑中廣之先生の指導を受けて)

紙芝居入門(5/29,6/19,7/3)

夏休み 創作指導

(8/4,8/7,8/21,8/23)



【「紙芝居制作の会」の活動紹介】



【「紙芝居制作の会」の活動紹介】

紙芝居制作の会(9/11,9/25,10/23)

夏休み後も活動を続ける～作業中の様子～



【「紙芝居制作の会」の活動紹介】

新たな出会い 3年目へ

☆2024.4.21. 邑久光明園 太田学芸員さん来校
邑久光明園「忍性展」での本校「紙芝居」展示について相談

☆代表者訪問
(紙芝居披露)



*紙芝居(制作)を“縁”としての交流

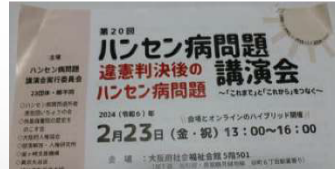
【「紙芝居制作の会」の活動紹介】

邑久光明園「忍性さんに逢う」展



【式下中学校にとっての「ハンセン病問題」】

ハンセン病問題講演会



違憲判決後のハンセン病問題
~「これまで」と「これから」をつなぐ~
2024.2.23.
大阪府社会福祉会館

【式下中学校にとっての「ハンセン病問題」】

回復者支援センター主催の催しに参加して

☆パネルディスカッション

支援センター職員の想いに感動!!

☆懇親会への出席

多くの療養所入所者、回復者の方々
との出会い 支援者の方々との出会い

【式下中学校にとっての「ハンセン病問題」】

◇講演会後の懇親会でのエピソード

回復者の方のお話から

- こどもに自分史を語れない
- 語れないのはなぜ？
- 背中を押す人々(支援者)

【式下中学校にとっての「ハンセン病問題」】

○ハンセン病問題の本質を見つめて

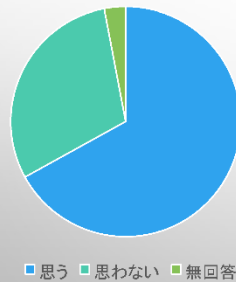
きわめて深刻な人生被害

名前 家族 子孫(つながるいのち) 進路 夢
社会生活 居場所 帰る場所(ふるさと)

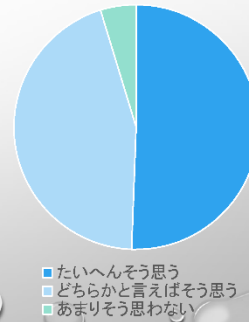
【式下中学校にとっての「ハンセン病問題」】

人権学習前後の比較(2年2学期と3学期)

(事前)ハンセン病問題は、「自分に関係のあること」だと思いますか。



(事後)ハンセン病問題は、「自分に関係のあること」だとして捉えることができましたか。



【紙芝居紹介】

式下中学校「紙芝居制作の会」

みなさん、こんにちは。

私たちは、式下中学校「紙芝居制作の会」です。今年の5月～美術部や英語部の生徒、有志生徒で「紙芝居制作の会」を発足し、まずは紙芝居について学ぶことから始めました。夏休みから取材や創作に取りかかり、二部作が10月末にやっと完成しました。

私たちの作品を通じて、本校ゆかりの忍性さんについて身近に感じていただけると有難いです。まだまだ練習不足ですので、どうなるかわかりませんが、あたたかく見守っていただけると幸いです。それでは、紙芝居の始まり、始まり～。





